

高岡の図書館

第110号

2024. 9. 1

編集・発行 高岡市立中央図書館（〒933-0023 富山県高岡市末広町1-7） TEL 0766 (20) 1818 FAX 0766 (20) 1819

レクリエーションの場としての図書館

富山県立図書館館長 東 仙 敏 彦

同志社大学の佐藤翔教授（当時は准教授）が、大学生などを対象に「図書館の思い出」について2022年度に調査したところ、図書館の思い出の多くは、「ポジティブな思い出（いい思い出）」だったそうです。（令和5年度公共図書館全県研究集会での佐藤氏の講演「人々にとって図書館とはなんなのか？：利用者研究から考える」より）

私自身も高校時代、学校帰りに近くの図書館によく立ち寄り、授業や試験で疲れた心をしばし癒した思い出があります。館内の静寂な空気に包まれながら、きれいに並べられた本の背表紙を眺め、目に留まった本を一冊とりだして読むひとときは、かけがえのない至福の時間だったように思います。図書館法では、図書館を「一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」と定めています。私の場合は、高校時代、教養や調査研究のためというより、レクリエーション、つまり娯楽のために図書館を利用させてもらったことになります。

図書館は社会教育のための機関ですが、それが成立した歴史的背景において、娯楽という要素を欠かすことはできません。公共図書館は、19世紀半ばにイギリスやアメリカで設立されたのが始まりとされています。その目的は、国民の教育水準の向上とともに、産業革命以降に増加した都市の人々に良質な娯楽を提供し、厳しい労働の合間にある余暇の時間をより充実させられるようにすることでした。

日本においては、1897（明治30）年に帝国図書館が設立、1899（明治32）年に図書館令が公布され、全国に公共図書館が整備されてきました。しかし、当時の文部省が作成した図

書館令の原案では、図書館は「学術技芸に関する図書」を収集するものとされ、余暇の充実という観点は考慮されていませんでした。「慰みのようなもの」が図書館にあると困るというのが理由でしたが、当時の帝国図書館館長が、有益で読書奨励に必要な小説もあるなどと訴えたこともあり、「学術技芸に関する」の文言は無くなりました。（長尾宗典『帝国図書館—近代日本の「知」の物語』中央公論新社 2023）

戦後は、図書館令に代わり、図書館法が新たに制定されました。その案の作成には、元帝国図書館司書で、富山県立図書館の初代館長も務めた加藤宗厚氏が関わりました。加藤氏は、図書館の目的の一つをレクリエーションとした草案を作成し、それがそのままの形で図書館法に反映されました。（加藤宗厚『私の図書館生活』1966）

図書館は、そこを訪れた誰もが、日常から離れ、自分が好きな本をゆっくりと読んで過ごせる場所です。変化が激しく、様々なストレスにさらされやすい現代社会においては、自身のウェルビーイングの向上のためにも、図書館の重要性はますます高まっているといえます。また、図書館は、子どもの読書習慣の定着にも大事な役割を果たします。子どもが図書館を訪れた時、自分の好きな本が見つかり、その本を読んで楽しかったという経験の積み重ねが、読書の習慣化につながっていくと思われるからです。この点からも、図書館が、教育・学習の場としての機能とともに、レクリエーションの場としての機能を備えていることはとても大切なことだと思います。これからも多くの若者が、図書館に対してポジティブな思い出をもつようになってくれることを願っています。

高岡市立中央図書館移転20周年に寄せて

元高岡市立中央図書館館長 太田 久 夫

人文科学系・自然科学系であれ、文化施設で一番早く設立されたのは、図書館であると言えよう。筆者は本紙『高岡の図書館』90号に「高岡市立中央図書館100年のあゆみ」を寄稿したこともあれば、74号には「新装なった中央図書館」を寄稿したこともある。現在地に移った中央図書館については、『県図書館協会報』や、高岡地区図書館連絡会の機関誌『創造』にも記しておいた。

本館の源流は、私立高岡市教育会が、明治40年（1907）に高岡高等小学校内に図書館を設けたことである。同43年高岡市に移管され、設置場所も変遷を重ねた。昭和26年（1951）の高岡産業博覧会のテレビジョン館を図書館に当てて開館したが、同38年の豪雪で被害を受け、古城公園内で建設された。しかし老朽化と狭隘化が進み、現在の高岡市美術館一帯での「文化の森構想」で、新館建設の計画が持ち上がったが、諸般の事情で現在地に移ったのであった。駅前で交通の便が良いこと、館内が広く、郷土資料を含むたくさんの資料を開架にしたことで、利用者は大幅に増えた。

現中央図書館は、旧館の約3倍の広さ、蔵書収納可能数は約35万冊。新設の部屋やコーナーとして、のびのびコーナー・おはなしの部屋・授乳コーナー・グループルーム・古文獻資料室、施設面では、子ども専用トイレの設置・段差のない施設・福祉コーナー新設・図書読み上げ機・拡大読書機の導入、資料面では、視聴覚資料の充実・ヤングアダルト資料の充実・児童図書の充実、藤子・F・不二雄コーナー設置など。旧館に比し、はるかに充実した施設として生まれ変わった。

しかしながら、図書館に対する多くの人のイメージは、無料の貸本屋、学生の勉強の場所のように思われているのではないだろうか。移転当初は、本当にたくさんの利用者があり、平成17年（2005）5月4日には平成16年（2004）4月の移転から1年余りで100万人目の利用者があり、令和2年10月10日には一千万人目の利用者が訪れ、高橋市長（当時）から記念品が贈られた。

この原稿を書いているとき、大河ドラマ「光る君へ」関連図書、オリンピック・パラリンピック関係資料、新札の肖像になった人物の資料、芥川賞・直木賞候補者の作品展示を行っていた。細かな展示であるかもしれないが、新聞記事にしてもらって、図書館の活動を広く知ってもらうようにしていただきたいと思う。

近年では、国立国会図書館のデジタル化資料も閲覧できるようになった。現中央図書館移転時に北日本新聞の記事をDVDで閲覧できるようにしたが、昔の記事を指一本で迅速に検索できるので大いに活用していただきたいと思う。本紙『高岡の図書館』は、市の刊行物で一番読み応えがあると評価してくださった方があった。現在は年1回の発行だが、せめて年複数回の発行にして、図書館の活動を知らしめる必要があると思う。

貴重な古文書は解説したうえで『高岡市史料集』として発行している。

筆者は、週に3～4日、短時間であるが中央図書館を利用し、その都度新知見を得ている。市民の皆さん、図書館を大いに利用しましょう。

平成 16 年以後の沿革（～令和 5 年（2023）

平成

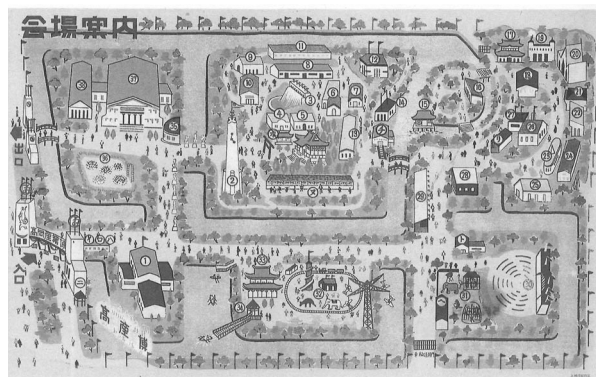
- 16 年 4 月 ウイング・ウイング高岡内に移転オープン。ＩＣチップによるＩＴ図書館システムの４館（中央・伏木・戸出・中田）同時稼動。配本巡回車本格稼動。窓口業務委託化。
- 17 年 11 月 合併により新「高岡市」が誕生。福岡図書館がＩＴ図書館システムに加わり５館（中央・伏木・戸出・中田・福岡）で稼動。
- 18 年 4 月 子どもの読書活動実践図書館として文部科学大臣表彰受賞
- 8 月 「高岡市図書館協議会」設置（既存の図書館運営協議会は解散）
- 22 年 7 月 創立 100 周年記念誌「100 年のあゆみ」発行
- 10 月 配本巡回車週 5 回に増便
- 24 年 3 月 図書館システム更新及び自動保存書庫管理機更新
- 25 年 1 月 たかおか生涯学習カードのデザイン変更（ドラえもん）
- 4 月 「高岡市立図書館雑誌スポンサー制度」を開始
- 27 年 7 月 国立国会図書館デジタル化資料送信サービス、官報情報検索サービス開始
- 29 年 2 月 マイナンバーカードによる図書館資料の貸出を開始
- 30 年 3 月 移動図書館での巡回終了
- 30 年 4 月 地域図書サービス開始
- 31 年 3 月 図書館システム更新

令和

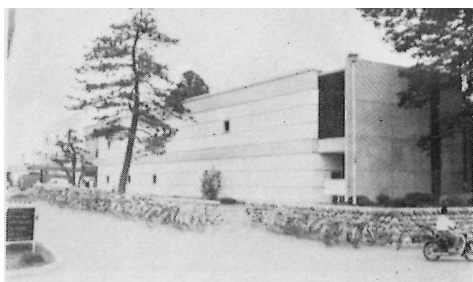
- 2 年 4 月 火曜日から土曜日の開館時間を午前 9 時から午後 7 時、休館日を毎週月曜日に変更
- 12 月 高峰譲吉博士関連資料常設コーナー開設
- 3 年 12 月 中央サービスカウンターに自動返却機導入
- 5 年 9 月 たかおか生涯学習カードをＩＣ型からバーコード型に変更
- 5 年 11 月 「たかおか電子図書館」開始



高岡図書館（明治 43 年～）



会場案内図（高岡産業博覧会の葉より）
左上㊸が図書館の位置



新築開館間もない頃（昭和 40 年頃）

明治 43 年（1910）、呉西初の高岡図書館として桜馬場の高岡物産陳列所の一棟に開設され、大正 14 年（1925）に裁判所跡地の古城公園内の二の丸に移転。昭和 26 年新館舎にて開館、38 年の豪雪の後、40 年に新築開館。

ふるさと情報コーナー

高岡関係資料情報

令和4年度に発行された図書、雑誌及び新聞に掲載された高岡関係資料のうち、図書館で把握できた文献の一部を紹介いたします。配列は資料の種類（図書・雑誌・新聞）順とし、出版年月の順に上から記し、左から資料名・論題名・執筆者名（敬称略）・巻号数の順に記載しました。

- 万葉線のあゆみ 万葉線開業20周年記念誌 (万葉線刊 令和4年4月)
- 高岡法人会70年のあゆみ (高岡法人会刊 令和4年8月)
- 富山県が生まれたころ (富山県公文書館刊 令和4年9月)
- 北陸の名城を歩く 富山編 (佐伯哲也編 吉川弘文館刊 令和4年9月)
- 北般若だより 北般若だより300号発行記念 (北般若だより編集委員会編 北般若自治振興会刊 令和4年10月)
- 金属から見る富山の歴史 (富山県埋蔵文化財センター刊 令和4年10月)
- 小勢地区の農業のあゆみ (小勢地区公民館連携推進協議会 小勢を語る会 小勢地区の農業のあゆみ編集委員会編 小勢地区自治振興会刊 令和4年11月)
- 設立40周年記念誌 (高岡市シルバー人材センター刊 令和4年12月)
- 富山県の鉄道 (服部重敬著 フォト・パブリッシング刊 令和4年12月)
- 語り継ぐ高商魂 高岡商業高校野球部100周年記念史 (富山県立高岡商業高等学校野球部創部100周年実行委員会刊 令和5年2月)
- 澤川物語 民俗と方言 (澤田宏著 桂書房刊 令和5年2月)
- 四十年の歩み (福岡町芸術文化協会刊 令和5年2月)
- 環の会活動報告書 2022 (環の会刊 令和5年2月)
- とやまの図書館ガイドブック (富山県図書館協会刊 令和5年3月)
- とやま花とみどり探訪
- 第9回 とやまの花壇 ～乳業の里・醍醐「きずな花壇」～ 高岡市立醍醐公民館 (VITA 129号 令和4年6月)
- 母校だより 高岡高にトレーニング室 旧高岡西高史料室も併設 (富山県人 1312号 令和5年2月)
- 珠洲で震度6弱 M5.4 負傷者5人、鳥居倒壊 高岡・氷見・射水・舟橋、県内最大震度3 (北日本新聞 令和4年6月20日)
- 夏の戸出 華やか 3年ぶり七夕まつり (北日本新聞 令和4年7月4日)
- 旧戸出物産跡地4ヘクタール 50戸の宅地開発 (富山新聞 令和4年9月1日)
- 中田「丸ごと」みょうが寿司 地元の名物に (富山新聞 令和4年11月19日)
- 高岡・砺波に新警察署 氷見・南砺・小矢部は分庁舎 (北日本新聞 令和5年2月15日)
- 初の中田春まつり 多彩な催しにぎわう (北日本新聞 令和5年3月12日)
- 追想 ありし日 郷土史家 樽谷雅好 (北日本新聞 令和5年3月27日)

富山県立図書館ホームページ「とやまの本」及び「県内記事情報検索」より

||||| 調査相談の窓口から |||||

…… おたずねくださいQ&A (福岡図書館) ……

図書館に寄せられる質問の中には、自館資料で回答できないものがあります。高岡市立中央図書館や富山県立図書館の資料をお借りして提供することもあります。お時間をいただくこともありますが、なるべく多くの資料を提供したいと考えています。また、中央図書館には国立国会図書館の図書館向けデジタル化資料送信サービス専用の端末がありますが、個人でも国立国会図書館に登録すれば、個人向け送信サービスを利用できます。

レファレンスの例

Q：戸出身とされている江戸相撲の大関九紋龍が、新潟県上越市出身だという資料を国立国会図書館の図書館向けデジタル化資料送信サービスでみつけた。新潟県出身とする資料は他にもあるのか確認したい。

A：九紋龍清吉を戸出身としている資料は、『越中史料』、『加越能力士大観』、『戸出町史』等があり、北日本新聞にも記事がある。ところが、国立国会図書館デジタル化資料送信サービスで確認したところ、『日本相撲史 上巻』（大日本相撲協会 1956 年発行）には、九紋龍の出身地は「越後（新潟県）頸城郡上曾根村の出身」と記載されている。また、『川柳しなの』（しなの川柳社 1980 年発行）においても「上越市上曾根出身」としており、「九紋龍の子孫は富山県に移住し、菩提寺には何も残ってない」との記述もある。図書館では、できるだけ多くの資料を探して提供し、判断は調査する方に任せる立場にあるので、「上越市出身」とする資料を他館から探して提示することとした。

◆高岡市立中央図書館より

『日本相撲大観』（新人物往来社）1992 年

◆富山県立図書館より（当館より調査を依頼し、回答いただいた資料）

『大相撲人物大事典』（ベースボールマガジン社）2001 年

『資料集成江戸時代相撲名鑑 下』（日外アソシエーツ）2001 年

『古今大相撲力士事典』（国書刊行会）1989 年

『上越市史 通史編 4』（上越市）2004 年

※墓と石碑の写真入り

『訂正越後頸城郡誌稿 下巻』（豊島書房）

1969 年 ※幼名、入門先の記載あり

Q：真龍院（鷹司隆子、前田斉広正室）が江戸から金沢へ下向する際に福岡で詠んだ歌「立ちつゞく 田つらに近き 菅の山 木の葉の里は 何所なるらむ」にある「菅の山」とは、天日干しをしていたスゲが山のようになっていたのか、実在する山なのか。

A：真龍院が天保 9 年 8 月に江戸から金沢へ下向した折の道中記『こしの山ふみ』等にお尋ねの歌がある。

「真龍院」で検索し、福岡所蔵の『高岡市史料集 第九集』（『真龍院君御道之記』を翻刻し掲載。同一の道中記）や、中央館から取り寄せた『真龍夫人・歌と生涯』、『江戸から金沢へ』を確認する。『高岡市史料集』によると、真龍院が福岡を通り石動に泊ったのが、8 月 20 日（旧暦）とあり、現在の暦では 10 月 8 日となる。（国立天文台日本の暦日データベース）

『越中福岡のスゲ栽培マニュアル』でスゲの刈り取り・乾燥の時期を調べると、7 月下旬から 8 月中旬までとしている。刈り取り後すぐに天日干しとなるようだが、よく日にあて白くするため、バラ干し後扇干しをしており、作業時期、作業手順からも、歌にある「菅の山」は刈り取って干したスゲではないと考えられる。

そこで、福岡から見える山に「菅の山」があるのかを調べる。福岡へは横田、和田、立野を通り、荒又川を渡って夕方に入っている。北陸街道を通り、西側には西山丘陵が見えていたものと考えられるので、その近辺の山を『富山県山名録』、『越中山座図巻』、『角川日本地名大辞典』で調べるが無かった。

なお、スゲ栽培は低湿地で行われていたようだが、『こしの山ふみ』を解説した図書は、「菅の山」を「菅の生えている山」と解釈している。（村本 雅美 記）

能登半島地震下の図書館

令和6年1月1日（月）16時10分、石川県能登半島を震源とするマグニチュード7.6の地震が発生しました。

当館のある伏木地区の震度は5強、地区内でも液状化現象がおき電柱が傾き、地震の爪痕が多く残っています。

地震が発生した日は休館日で人的被害はありませんでしたが、所蔵している図書が書架から落下する被害がありました。



・一般書 書架の様子



・児童コーナー 書架の様子

地震によりかなりの数の図書が書架から落下したため、1月4日から9日まで臨時休館とし、図書に破損等がないか1冊1冊確認しながら、書架に戻しました。書庫については、集密書架（普段は書架と書架の間が閉じている。必要に応じて開く）のため一見、図書の落下が少ないように見えたのですが、書架を開くと図書がなだれ落ちてきました。こちらも開架と同じように破損がないか確認してから書架へ戻しました。児童コーナーは、書架が低いせいか落下等の被害は少なく済みました。幸い破損した図書はありませんでした。

今回、書架の上段2段からの図書の落下が多かったため、地震の備えとして、図書落下防止の落下軽減ガードテープを貼付し、予定どおり1月10日から開館することができました。

多くの方々からお見舞いの言葉をいただきました。ありがとうございました。

（伏木図書館 布子 雅子 記）

たちばなののりなが
橋 則 長

令和6年のNHK大河ドラマは平安時代が舞台で、「源氏物語」の作者紫式部（むらさきしきぶ）を主人公に、藤原道長（ふじわらのみちなが）を初め藤原氏一族の人々が多く登場しているが、清少納言（せいしょうなごん）、和泉式部（いずみしきぶ）など藤原氏以外の女房達も活躍中だ。

この登場人物の中に誰か現在の高岡市に関係した人はいないのか。紫式部は父・藤原為時（ふじわらのためとき）の越前赴任に同行している。では、越中は？為時が越中に赴任したと記すものもあるが、それは「越後」の誤りとされている。ちなみに、為時の息子・惟規（のぶのり）は越後に下ったとき、重い病気に罹り亡くなっている。和泉式部は、母が越中守・平保衡（たいらのやすひら）の娘らしいが、残念ながら和泉式部が越中にやって来た様子はない。清少納言は、息子の橋則長（たちばなののりなが）が越中守として赴任している。しかし、彼はなんと赴任した翌年に越中で病没した。

橋則長のたまかなプロフィールを記す。「清少納言 人物叢書」によれば、則長は天元5年（982年）橋則光（たちばなののりみつ）と清少納言の間に生まれている。寛仁元年（1017年）に非蔵人、治安元年（1021年）に蔵人、図書権助、治安2年（1022年）修理亮、治安3年（1023年）式部丞、万寿元年（1024年）従五位下となっており、長元6年（1033年）に越中守に任じられたが先に記したように長元7年（1034年）に亡くなっている。則長の死については、則長の弟・橋季通（たちばなのすえみち）が詞書「橋則長、越にてかくれ侍りにける頃、相模がもとにつかはしける」に続けて詠んだ歌「思ひ出づや思ひ出づるに悲しきは別れながらの別れなりけり」（「後拾遺和歌集」）がある。橋則長と親密であったことがあるらしい相模（さがみ）とともに、客死した兄・則長を悼んだ歌とされている。（則長は任国に行かず、都にとどまっていたとする説もある）

ところで、父親の橋則光は、時折「枕草子」に清少納言のかつての夫として登場しており、和歌は不得手とされているが、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」に武門の家柄ではないが、豪勇をもって知られた人物として語られている。一方、母親の清少納言は「枕草子」の作者としてあまりにも有名。則長本人は、「後拾遺和歌集」に3首、「新続古今和歌集」に1首入集されている。

奈良・平安時代の高岡市伏木地区は高台に古代の役所や住まいなどがあった。越中国府は、国庁（国の政庁）が勝興寺境内地、国衙（国の役所）は勝興寺周辺が推定地とされている。病身の橋則長が、伏木の高台から辺りの景色を眺めることはあったのだろうか。

【参考資料】

「宇治拾遺物語 古本説話集 新日本古典文学大系 42」三木紀人ほか校注 岩波書店刊

「後拾遺和歌集 新日本古典文学大系 8」久保田淳、平田喜信校注 岩波書店刊

「今昔物語集 新日本古典文学大系 36」小峯和明校注 岩波書店刊

「十訓抄 新編 日本古典文学全集 51」浅見和彦校注・訳 小学館刊

「新続古今和歌集 和歌文学大系 12」村尾誠一著 明治書院刊

「清少納言 人物叢書」岸上慎二著 吉川弘文館刊

「富山県史 通史編 I 原始・古代」富山県編・刊

「枕草子 新日本古典文学大系 25」渡辺実校注 岩波書店刊

「越中国府解説パンフレット」高岡市万葉歴史館編集協力 高岡市教育委員会刊

（佐藤 里美 記）

お知らせ



令和×万葉
TAKAOKA

行事予定(変更になる場合があります)

中央図書館

えほんのじかん 毎週火～金曜日
(休日を除く)
午前11時～15分程度
えほんの広場 毎週土、日曜日、休日
午前11時～30分程度
土曜おはなし会 午後2時～2時30分
第1土曜日 高岡おはなしの会
第2土曜日 図書館ボランティア
第3土曜日 チルドレンズシアター
(高岡第一学園
幼稚園教諭・保育士養成所/年4回)
第4土曜日 人形劇団どんぐりコロコロ
第5土曜日 劇団「喜び」
高岡婦人読書会 毎月第3水曜日 午後2時～

伏木図書館

こども読み聞かせ会 毎週土曜日 午前11時～
伏木読書会 第3土曜日 午後1時30分～

戸出図書館

こども読み聞かせ会 毎週土曜日 午前11時～

中田図書館

子ども読み聞かせ会 毎週土曜日
午前10時30分～

福岡図書館

おはなしの部屋(読み聞かせ等) 毎週土曜日
午前11時～

最新の実施状況は、図書館のホームページを
確認するか、お電話などでお問合せ下さい。

たかおか電子図書館

令和5年11月より「たかおか電子図書館」
サービスを開始しました。

インターネットを通じて24時間いつでも、
どこでも、スマートフォンやタブレット、パソ
コンから電子書籍が利用できます。

まずは、図書館への来館が困難な子育て世代、
電子書籍への興味が高い小・中高生、外国人利
用者向けのコンテンツを提供しています。

○利用対象者

令和5年9月1日以降「たかおか生涯学習カー
ド」を登録された方で、高岡市内に在住・在学・
在勤の方

○利用方法

図書館ホームページから「たかおか電子図書
館」にアクセスし、利用者IDとパスワードで
ログインします。

貸出は1人2点、15日間まで。期間を過ぎる
と自動的に返却となります。

〔古文書関係の事業〕

○古文書解読事業

中央図書館所蔵の古文書を解読し、『高岡市史
料集』として発刊しています。

○古文書を学ぶ会

中央図書館所蔵の古文書をテキストとして、近
世の高岡の様子を学びます。今年度は、「能州漂
客話」(長崎家資料より)をテーマに取り上げ、
年4回開催します。

午前10時～11時30分

(受講受付は締切ました)

○高岡市史料集解説講座

今年度は、11月16日(土)に開催予定。毎年
3月末頃発刊の『高岡市史料集』の解説文に基づ
き解説します。「市民と市政」11月号などをご覧
ください。

「高岡の魅力発信 デジタルアーカイブ事業」

中央図書館が所蔵する江戸期以降の郷土史を知
るのに貴重な古文書や写真をアーカイブ化し、ホー
ムページ上に公開しています。アクセスし易くす
ることで、高岡の魅力を再発見し、次世代につな
げます。

高岡市立中央図書館 〒933-0023 末広町1-7
高岡市立伏木図書館 〒933-0104 伏木湊町13-1
高岡市立戸出図書館 〒939-1104 戸出町3-19-29
高岡市立中田図書館 〒939-1272 下麻生1108
高岡市立福岡図書館 〒939-0132 福岡町大滝44

TEL (0766) 20-1818 FAX (0766) 20-1819
TEL (0766) 44-0073 FAX (0766) 44-0073
TEL (0766) 63-1254 FAX (0766) 63-1254
TEL (0766) 36-0054 FAX (0766) 36-0054
TEL (0766) 64-1034 FAX (0766) 64-1038